

小羊学園・三方原スクエアにおけるコーヒーショップ活動を通してみる入居者および職員のニーズに関する研究ーその2ー

小松啓*¹⁾、辻郁¹⁾、藤田さより¹⁾、野方円¹⁾、野田由佳里¹⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学

I 研究事業の概要

地域保健福祉実践研究センターが開設される4つの目的として掲げられた「保健医療福祉分野に係る全ての人たちへの研究支援」や「保健医療福祉分野に係る地域住民への教育・相談」に関わる事業として、2009年から小羊学園におけるコーヒーショップ活動が実施され、本年はその2年目に当たる。

II 研究事業の目的

- (1) 小羊学園・三方原スクエアにおいてコーヒーショップを開設することにより、利用者や職員との交流を深める。
- (2) それにより、小羊学園における様々な課題やニーズを把握し、それへの対応や共同研究の可能性を探る。
- (3) さらにこの地域に点在する他の保健医療福祉の施設や地域住民を巻き込んだ事業や研究を展開する可能性を探る。

III 研究事業の経過

1. 小羊学園・三方原スクエアとは

社会福祉法人小羊学園として、知的障害児のための生活施設、通所施設を運営してきたが、2008年に新しく小羊学園・三方原スクエアを開設し、少人数での生活ができる居住棟と日中集まって活動する場所を分け、日中集まるための建物は、通所のためのスペースと地域に開かれた交流スペースを設けた。

施設も地域の一部として、地域の人々と共に利用者を支えたり地域の問題を共に考えていく場所としたいという施設側の観点から開設され、その中心にある交流スペースは広々としたたたずまいに、キッチンスペースがあって、さまざまなプログラムに対応できるようになっている。

本研究におけるコーヒーショップの開店は、この交流スペースを会場として、行われている。

2. 2010年の研究の経過

- 1) 2010年3月31日 出席者：辻郁、藤田さより、小松啓により、2009年度のふりかえりと今年度の展望と計画を立てる会合を開いた。

(1)2009年度で達成されたことは、

- ①小羊内におけるコーヒーショップの定着と
- ②学生の教育

(2)2010年度4月～9月までの目標としては、

- ①新3年生の訓練強化（シェフとしての自覚をもって業務に専念し、新2年生の教育に当たる）—新3年生は後期から実習に入るので、前期のみの関わりとなる。
- ②新2年生の訓練—前期から週に1回の割合で小羊に実習で入るので、小羊になれるながら、コーヒーショップの業務に関わる—後期は新2年生が新シェフとなる
- ③2010年度後期に考えている地域主体のコーヒーショップへの移行への準備、地域の人材発掘—ゆうゆうやエデンの園の入居者、根洗荘デイサービス利用者、教会関係者への働きかけ—この件に関しては、稲松理事長、山崎施設長と協議する必要あり
- ④教員のバックアップ体制としては、小松が常駐、辻と藤田は隔週参加、ボランティアとして本学社会福祉学研究科修了生のM氏に参加を依頼する。小羊から施設長が留守のときにもう一人職員を配していただくことを要請する。

(3)2010年度10月～2011年3月まで：地域主体のコーヒーショップへの移行期として考えたい。

2) 2010年4月9日 山崎施設長、辻郁、藤田さより、小松啓による2010年4月からの本研究事業についての話し合い。

- (1)上記の計画案を山崎施設長に提示し、承認を得る。小羊からは、施設長不在の時には出水氏が入ってくださることとなる
- (2)施設長より、最終的な目標としては、小羊で地域的活動として、毎週日曜日にコーヒーショップの開店を実施、道路わきに看板等も掲げてはどうかなどの提案が施設長から開示された。その際には、もとより協力者として大学側の人間も関わることとなるとの話し合いがもたれた。

3) コーヒーショップの開店

2009年10月～2010年3月に引き続き、2010年4月から2011年3月まで、毎月1回、日曜日午後2時～4時まで小羊学園・三方原スクエア・交流スペースにて、コーヒーショップを開店した。初めは、第3日曜日に開店したが、11月からは支えてくれるボランティアの女性の都合で第4日曜日に変更された。

(1)2010年4月～2011年3月まで11回にわたり開店した。(8月は小羊学園の夏祭りがあり、そこでコーヒーショップを開店、合流した。)

①参加人数：

利用者数（施設職員も含む）：多い時で63名、少ない時で33名、平均47名の盛況であった。

参加学生数：多い時で12名、少ない時で6名のリハビリテーション学部OT専攻生と社会福祉学部生が毎回参加した。

特に7月18日から初めて社会福祉学部野田ゼミの学生が参加、本企画初めての2学部連携の場となる。以下、その時の研究代表者から共同研究者へのメールによる報告を引用する。

各位、小松啓です。昨日のコーヒーショップはOT学生と社福の学生が初めて一堂に集うという記念すべき日となりました。まだなれない社福の学生たちも次第にOTの学生さんと歓談する光景も見られました。

利用者さんも何となくグループに分かれて、コミュニティールームに集う人たちとその向こうのお部屋に集う方たちがいて、その向こうの部屋の方たちが百戦錬磨というか、無法地帯というかの方々で、若い学生さんたちには、ちょっと近づき難い方たちかと思われましたが、山崎施設長から、そちらの部屋の方々は、いわゆる古くから

の小羊の入居者さんで、とても勉強になる人たちだよ、と言われ、学生さんたちを誘って、アプローチを試みました。

学生ボランティアリーダーのTさんもじっくりとその方たちと付き合われて、コミュニケーションをお取りになり、お互いに実りのあるひとときを過ごされたのではないかと思います。大変長く付き合ってくださいだったので、少々お疲れになったかと心配しましたが、「大丈夫です」とにっこりされていました。



4) 本研究事業への学生以外のボランティアの参加

(1)2010年6月18日、リハ学部辻准教授からのご紹介の脳卒中回復者グループのCHさんがボランティアとしての参加を開始。それまでのNシェフについて本格的コーヒーの淹れ方を直ちに修得し、3代目シェフに就任する。(2代目シェフはリハ学部OT学科のF君で、1代目の社会福祉学部N助手は、日曜日の都合がつかないため、シェフの道は後進に譲ることとなる。)

(2)2010年10月31日から本学社会福祉学研究科修了生のM氏がボランティアで入ってくださる。当人は以前、小羊学園で事務職勤務であったこともあり、利用者の知己も多く、利用者和我々大学関係者との間を取り持つ、稲松理事長によれば、フロアマネージャーのような役割を果たしてくれるようになる。

5) 地域へのボランティア募集活動

下記のようなチラシとポスターを作り、2010年6月、近隣高齢者施設のエデンの園、ゆうゆうの里、アドナイ館を訪問する。施設の生活相談員や施設長と面談して、趣旨の説明や募集のお願いをし、また施設内にポスターも貼らせていただいたが、結果的には、成果ゼロであった。いずれの施設も有料高齢者施設関係ということもあり、利用者の地域への関心度がいまいち低いということがその理由のようであった。利用者の方をお誘いするには、もう少し、時間をかけて利用者の方と日常的に接する機会を作るのが先決という印象を受けた。いきなりお誘いしても効果は上がらないことだろうか。

+++++

小羊学園三方原スクエアコーヒーショップでシェフをやってみませんか？

+++++



私たち、聖隷クリストファー大学のリハビリテーション学部および社会福祉学部の教員たちは、学生たちと共に、2009年10月から小羊学園三方原スクエアのコミュニティホールにて、毎月1回、日曜日の午後に、入居者や地域の方々と共にコーヒーショップを開店しています。



小羊学園は、知的なハンディを背負った子どもさんたちのための通所および入居施設ですが、多くの方がコーヒー好きでいらっしゃることもあり、毎回大変喜んでご利用いただいています。



このコーヒーショップの試みは施設の入居者や職員と地域の方々とのあたたかい交流の場所の一つとなればとの思いで、開店させていただき、今は大学の教員や学生が主にお手伝いをしておりますが、これからはできるだけ地域のさまざまな方のお手伝いをお願いし、施設とご近所のいっそうの交流を深める機会になってほしいと願っています。



コーヒーを入れる経験等は問いません。まず何より、日曜の午後のひととき、ぶらりと小羊学園三方原スクエアにお寄りいただき、皆さんで楽しくコーヒーを召し上がってみてはいかがでしょうか。ご自分のなかで、何かが変わるきっかけになるかもしれません。でもそれより何より、おいしいコーヒーを楽しんでいただければと思います。皆様のお出でを心からお待ちしています。

6) 夏祭りへの参加

2010年8月14日、小羊学園恒例の夏祭りが行われ、学生10余名と大学教員も参加し、そのなかでコーヒーショップも開店した。利用者は夏祭りのご馳走や、来園した父兄との交流に忙しく、来店者はいつもより少なかったが、本学学生や教員の施設夏祭り参加ということで意義があった。学生たちは、利用者参加のゲーム等でもリーダー的役割を果たし、その本領を發揮した。

7) コーヒーショップ開店1周年記念

2010年9月19日、昨年10月の本コーヒーショップ開店から丁度1年ということもあり、コーヒーにつけるお菓子を少々豪華にして提供した。利用者はお菓子に熱中していたが、施設職員は「もうそんなになりますか」と感慨深く述べておられる方もいた。

8) 学生ボランティア交代に対応したコーヒーショップ覚書の作成

本研究事業を開始時より大いに支えてくれたリハ学部 OT 学科の現3年生が10月より実習のため、下級生に本事業へのボランティア的支援は移譲されるので、誰が見てもよく判る覚書を藤田さより助教が作成し、学生たちに配布された。

9) ミーティングの実施

(1) 毎回コーヒーショップ閉店後、簡単に学生と教員が締め挨拶程度のミーティングを行い、特に初めて参加の学生の感想などを聞く機会とした。

(2) 施設および大学教員学生の参加による懇談会の開催

施設側職員と本学側学生、教員の懇談会を早くから計画していたが、なかなか両者の日程が合わずのびのびになっていたところ、やっと2011年3月27日のコーヒーショップ閉店後実施することができた。施設側職員は多忙のなか3名の参加（山崎施設

長を含む)であったが、学生側は1年生を含む10余名の参加で、活発な話し合いが行われた。

学生からは、特に1年生からは、先輩の後をついて参加した。初めは何も判らなくてうろろうしてしまっていたが、回を重ねるにしたがって次第に慣れてきた。初めは緊張したり、どうしたらよいかわからなかったり、戸惑うことも多かったが、慣れてくると相手の思いが少しずつ分かるようになってきた。回数を重ねることが大切であるという発言があった。

3年生たちベテランの学生は、とにかく楽しかった、ここが自分たちの拠点だという気がして、参加できない時も何か気になるほど、ここでの活動が身についてしまったとの発言があった。

職員からは、学生さんが来てくれることだけで、いつもと違うことや関わってくれることが、利用者により変化となる。利用者も言葉には出さないが、楽しみにしていると思う。スタッフは、利用者の出かける場所が増えたと喜んでいる。自分たちとは違う表情が見られると職員は感じている。このようなふらっと出かけられる場所があるのはよい。是非続けてほしい。

地域の方にも来てもらいたいが、どこまで広げることが可能か考えなければ。方法としてはチラシを周辺に配るとか、教会に礼拝に来た人に声をかけるなど。

学生の利用者への対応としては、人との関わりに、葛藤を感じるという経験は大切。葛藤を体験し、それを乗り越えていくことが重要である。そこで知らず知らずのうちに自分を出していくということを学んでいくのではないか。失敗を体験し、それを成功体験と結び付けていければ。

またリハビリの専門家に聞きたいことがある。「どこを見る?」「何を見る?」という視点の違いについて聞きたい。立ちかた、立ち上がり方などをリハビリのスタッフはよく見ていて、ちょっとした指示で全然違う結果となることがあった。そういうことを学びたいと思う、というような発言があり、この研究事業は末長く続けてほしいという気持ちが明確に表明された。

IV 研究事業の成果（地域との連携の成果）

- 1) 施設長や理事長とのふりかえりのミーティングの結果やコーヒーショップの店内で日常的に交わされるスタッフとの会話、そして何より、待ちかまえていたかのように、職員に手をひかれて店内になだれ込んでくる利用者たちの笑顔を見れば、このコーヒーショップの開店を喜び、楽しんでいただいております、またさらなる発展や進化を期待されていることは十分に感じ取ることができる。目的としてあげたなかで、第1の点についてはほぼ達成されたと思われる。目的の第2と第3に関連させて、感じたことを次にあげる。
- 2) 職員との交流については、その難しさー職員は忙しすぎる、話し合う機会がなかなか見つけられない点を前年度の報告書にも述べているが、その状態は変わらない。ただ、2年目に入り、職員も大学側もそれぞれ慣れてきて、利用者を前にして、ゆっくりしていられる職員も何人か見受けられるようになったのは、2年目の変化かと思う。そのようにして下さると、こちらもしゃべりやすいし、利用者についての情報を得たり、利用者も共に、楽しくゆっくり語り合うことができたという場面が見られた。
前年のアンケート調査にもあるように、職員はとにかく施設の風通しをよくすること、施設以外の人にとにかく訪ねてきてほしいということをも熱望しており、その意味ではこのコーヒーショップの試みは、貢献ができていないのではないと思われる。
- 3) 学生と利用者との関係についても、3年生の余裕はともかくとして、初めて参加した1

年生も、先輩のゆうゆうとした利用者との対応につられて、というか学生グループ全体の経験の力というか、前年の学生よりはるかに速くこの雰囲気になれ、あっというまに利用者と交流を始めている学生をみることができたのは、2年目の成果だろうか。

ある1年生は、参加2回目くらいに、自分が持ってきた地図をプリントしてあるハンカチを使って、20分もあまり言葉のない利用者と一緒に楽しい語り続けることができたのである。小道具を使っての利用者との交流は、以後、さまざまな形で学生たちに受け継がれていくことになる。このころの研究代表者から共同研究者への報告メールを引用する。

先生方各位、小松啓です。11月28日のコーヒーショップは、リハの学生6名+お客として参加された3年生のTさん、社会福祉介護の3年生1名、藤田先生、ボランティアのCHさん、Mさん、小松でした。

学生さんたちとの協力もスムーズで、14時前に準備ができて、13時50分から始めることができました。皆さん手際がよく、あらら、あららという間に時間が過ぎ、男子利用者さんのいつもの猛者たちもしっかり来てくれましたし、コーヒー大好きなSさんはご機嫌で、にこにこしながら私のお腹に2回ほどパンチを下さいました。

愛嬌たっぷりの女性の利用者さんのHさんたちのしっとりした女性のテーブルも和やかで、女子学生たちも入って、ゆっくり懇談の時を持っていました。CHさんともう一人のリハ男子学生のシェフも手慣れたものでした。15時30分にはそろそろ店じまいとなり、あっという間に時が流れたという印象です。



- 4) 地域の人との交流は今後の課題であるという点は前年と同じである。本年度は特に、積極的に近隣の高齢者施設へのお誘いに打って出たが、結果は全敗であった。地域との日常的な交流の必要性があらためて強く感じられるきっかけとなった。
- 5) 同じく前年からの課題である施設職員との共同研究は、具体化はしていないが、広く地域や職員、施設長たちを巻き込んだアクションリサーチのような試みは実現しうる土壌は形成されつつあるように思われる。「知的障害に関わる人々の群れの形成と発展」というようなテーマでどうだろうか。